

詩集

野焼きの後に

斎藤久夫

斎藤久夫詩集

『野焼きの後に』

渡辺 孝行

詩集 野焼きの後に 斎藤久夫

「零年」からの旅の途上にある私たち。その景色のなか、広大な末黒野が見えて、さらに見上げると、遙か彼方の山上に方舟の影さえ……。千年といい万年といえど、さほどの昔のことではないとの認識に誘われる。ならば十年など瞬く間、しかしこの間にこそあるどれほどかのものが苦しみ、悲しみが見過ごされよう

としていることか——。そんなおもいを鮮やかに束ね、見通しを開いてくれるような詩集だった。

前半十篇、後半十一篇から成る二部構成(後半のうち四篇が組詩なのでのべ十九篇)。前半の各篇は前作『零年の肖像』の続編として読んだ。後半では災後十年から立ち上がってくる旅の展観に彩色を施そうとしている作者の現在を伝えていくようで、ひろびろと鳴り渡るような余韻に、絵というよりは音楽的な感興を誘われた。

詩集タイトル「野焼きの後に」は第一部2篇目「末黒野」からの銘だろう。

ここに村があつて／ここを追われ／その村を歩く／見渡すと／春三月野焼きの後の末黒野／……

その村は栃木県佐野市の旧谷中村だ。足尾銅山鉱毒災害により、あるうことか弾圧を受け、汚染水処理のために消された村。そこに造営された

渡良瀬遊水地の、日本最大の遊水池「谷中湖」となった村。野焼きは、そうした歴史を背景に出現した広大なヨシ原を

焼く今日の春の風物詩で、燃え尽きた後の黒々とした光景が末黒野。その黒は私たちの景色の中の黒とかさなり：

蛇足になるが、足尾銅山鉱毒に苦しむ人々のために政治家生命なげうった田中正造は

「真の文明は山を荒さず、川を荒さず、村を破らず、人を殺さざるべし」の言葉を遺している。

作者とは詩誌「卓」の同人として出会った。旅の詩人なのだなおもっていたが、それはヒューマニズムを遡る旅

だったかと認識を新たにしたら。

(After us the deluge) /

No

(われわれの死んだあとなら洪水になってもかまわない) / —否

この詩集の最後「薔薇が」の前に置かれた、「十年目の桜並木(夜の森)」の結び、「無人の午後の町 樹齢百年 / 千五百本の桜並木のなかで」の、作者の自問自答だ。

私たちはあの日難民となり、難民としての世界の目を開かされた。遅きに失したとは言うまい。もはや一つの世代を生ききろうとしているとはいえ、紛れもなくその因果に立ち合った責任世代であるのだから。